

機能・福祉・潜在能力

——センの規範的経済学の基礎概念——

鈴 村 興 太 郎*

1. 規範的経済学に対するセンの批判

規範的経済学の最近の発展に対して、アマルティア・セン(1933-)が果たしてきた役割は比類なく大きく、その影響は広く深く浸透している。経済的不平等・貧困・生活水準の基礎理論の構築とその具体的な適用、ケネス・アロー以降の社会的選択の理論の精緻化とその射程距離の拡大、個人の自由と権利に視座を定めた新たな福祉と開発の経済学の展開など、センが据えた道標を辿って推進されてきた研究は、理論的にも実践的にも、すでに不可逆的な潮流——ポスト厚生主義(post-welfarism)の規範的経済学——を形成しつつある。

センが推進してきたこのような積極的な研究の背景には、正統派の規範的経済学の基礎に対して彼が一貫して提起し続けてきた厳しく透徹した批判がある。この批判には、2本の柱がある。

【1】正統派の規範的経済学は、《旧》厚生経済学の創始者アーサー・ピグーが高く掲げた理念¹⁾とは裏腹に、人間生活の改良の道具を探究する実践科学としては、多くの果実を生み出したとは言えそうにない²⁾。この現状に対して最大の責めを負うべきは、正統派の規範的経済学の情報の基礎が著しく狭隘だという方法論的な欠陥である。この欠陥には3つの側面がある。

(1)厚生主義(welfarism)＝経済システムの成果を評価する際に、そのシステムがもたらす帰結(consequence)に排他的に注目して、そのシステムの手続き的特性を無視する帰結主義

(consequentialism)に依拠するのみならず、帰結の価値を評価する際にも、その帰結が各個人にもたらす厚生(welfare)のみを評価の視野に採り入れて、帰結のもつ非厚生的な特徴をおしなべて無視する考え方。

(2)序数主義(ordinalism)＝個人の厚生がもつ基数的な意義を一切否定して、厚生とは、選択肢に対して定義される選好順序(preference ordering)の序数的な——順序保存的(order-preserving)な——数値表現であるに過ぎないとする考え方。

(3)個人間比較の不可能性(interpersonal non-comparability)＝個人の厚生の水準にせよその測定単位にせよ、個人間でその大小を比較することに対して、オペレーショナルな意義を完全に否定する考え方。

センによれば、これら3つの情報的制約を受け容れることによって、正統派の規範的経済学は個人の福祉(well-being)に関して意義ある考察を行う資格を自ら放棄したに等しい。アローが樹立した一般不可能性定理(general impossibility theorem)は、(1)(2)(3)という3つの特徴を満足する情報の基礎に立つかぎり、意義深い社会的厚生判断を形成することは不可能であることを異論の余地なく示したという意味で、むしろ非常に積極的なメッセージを含む命題なのである。

この最後の論点は重要なので敷衍しておきたい。よく知られているように、ピグーが依拠した社会的厚生判断の基礎原理は、ベンサム流功利主義(utilitarianism)の原理だった。《旧》厚

生経済学のこの情報的基礎に対してライオネル・ロビンズは、異なる個人が享受する厚生を相互に比較する客観的——科学的——な方法は存在しないという主旨の批判を提起して、厚生 of 個人間比較を厚生経済学から追放したのである。だがロビンズは、社会的厚生判断の情報的基礎としてひとびとが享受する厚生のみを許容する厚生主義の原理に対しては、これを当然の前提として承認していた気配がある。功利主義は厚生主義のごく特殊な一形態に過ぎないから、厚生 of 個人間比較を拒否して功利主義を厚生経済学の基礎原理の地位から追放しても、それで直ちに厚生経済学 of 一般的可能性が一挙に否定されるわけではない。問題はむしろ、功利主義的基礎を奪われた厚生経済学に対して、功利主義に替わる新たな社会的厚生判断の基礎原理を与えることができるかという点に移ったと言すべきなのである。

厚生経済学 of 功利主義的基礎が崩壊した後の空白を、厚生 of 個人間比較可能性を要求しない序数的厚生主義に立脚して埋めるという課題は、アブラム・バーグソンとポール・サミュエルソンが提唱した**社会厚生関数**(social welfare function) of 概念によってひとまず達成された。バーグソン＝サミュエルソン of 社会厚生関数とは、ひとびとの経済厚生に関する序数的情報のみに基づく社会的選好順序——さらに正確に言えば、社会的選好順序 of 序数的な数値表現——に他ならない。サミュエルソンは、この意味における社会的選好順序が形成されるプロセスないしルールを問うことは、厚生経済学 of 本来 of 課題ではないと主張した。彼によれば、厚生経済学 of 固有 of 課題は、

(α) 与えられた社会厚生関数に関して望ましい資源配分状態を特徴付けること

(β) 最適な資源配分 of 実現のために有効な政策措置 of 体系を設計すること

に他ならないのである。われわれが正統派 of 厚生経済学と呼ぶものは、バーグソンとサミュエルソンが築いたこの基礎のうえに構築された論理的建造物 of ことである。いまや厚生経済学はベンサム of 亡霊と絶縁して、新たな科学的基礎

を得たかに思われた。

厚生経済学 of この新たな基礎に対して、極めて衝撃的な批判を提出した経済学者こそアローだった。彼は、アド・ホックな社会厚生関数を前提して最適な資源配分を考察すること of 意義を疑問視して、ひとびと of 厚生評価に基づいて社会厚生関数を形成するプロセスないしルール of 存在可能性の問題を始めて提起して、このプロセスないしルールに**社会的合理性**(collective rationality)と**情報的効率性**(informational efficiency) of 2つの要求を課せば、そのもとで適格なルールは非常に病理的な**独裁性**(dictatorship)ルール以外には論理的に存在しないことを論証したのである。アロー of 社会的合理性は形成された社会的選好順序が論理的矛盾を含まないことを求め、情報的効率性は社会的選好を形成するために収集すべき個人的評価に関する情報が、最大限に節約されていることを求める条件であるに過ぎない。それだけに、アロー of 定理が社会厚生関数を鍵概念とする厚生経済学 of 新たな基礎に投げかけた批判は、極めて深刻なものであった。

アロー of 定理 of 衝撃に照らして、われわれは厚生経済学 of 死亡宣告を行うべきだろうか。私見によれば、そのような宣告は些か時期尚早である。一般に、ひとびと of 個人的厚生評価に基づいて社会的厚生判断を形成するプロセスないしルールは、個人的厚生情報を投入して、社会的厚生情報を産出する一種 of 計算機構であると考えることができる。それでは、アローが考察した計算機構は、情報投入量に関してどのような制約を負わされていたのだろうか。

第1に、アロー of 計算機構は、厚生情報 of 個人間比較を一切許容していない。これは、彼が用いた分析的枠組みが——ロビンズ、バーグソン、サミュエルソン of 系譜を継承して——厚生 of 個人間比較不可能性に立脚すること of 当然 of 帰結である。

第2に、序数的厚生主義に立脚するアロー of 計算機構は、収集した厚生情報 of 序数的性質しか利用できないように設計されている。したがって、ひとびとが社会状態に対して与える選好

評価のランキングだけが、計算機構にとって利用可能な情報源となる。そのため、この計算機構は——個人の**選好強度**(preference intensity)のような——個人的厚生に関する基数的情報を利用する能力を全面的に剝奪されている。

第3に、許容されるかぎりの序数的で個人間比較不可能な情報ですら、アローの情報の効率性の要求によって、その利用限度がさらに低く設定されている。

計算機構への情報投入がこれ程まで厳格に制約されれば、それに基づいて産出可能な情報も自ずから貧弱なものにならざるを得ない。それにも拘らず、社会的厚生判断が絶対に論理的矛盾を犯さないことを要求すれば、そこまで苛酷な制約を満足する計算機構は非常に病理的なものに限定されざるを得ない——これがアローの定理を理解するひとつの方法である。有意義な厚生経済学あるいは福祉の経済学を建設するためには、厚生¹の個人間比較を要求しない序数的厚生主義は、情報の基礎として明らかに不適切だといふべきなのである。一見したところ否定的なニュアンスが漂うアローの一般不可能性定理だが、この事実を明確に摘出したという点において、その積極的意義を高く評価すべきである。

【2】正統派の規範的経済学においては、個人の**選好**に苛酷な重荷が負わされている。事実、この理論に登場する個人は全ての選択肢に対してただひとつの選好順序をもち、彼の**利害**(interest)はこの選好順序によって表現される。また、彼の厚生(welfare)の改善・改悪は、この選好順序の階梯を上昇するか下降するかによって判断される。そのうえ、彼の**選択**(choice)行動も、同じ選好順序によって表現される。すなわち、与えられた機会集合から彼が選択する選択肢は、その機会集合に所属する選択肢のなかで彼の選好順序にしたがって最善と判断される選択肢であるというのが、この理論の標準的なシナリオなのである。

センによるこの主旨の批判がまさに妥当する著名な一例は、完全競争均衡が実現する資源配

分とパレート効率的な資源配分との間に正確な対応関係が存在することを主張する**厚生経済学の基本定理**(fundamental theorems of welfare economics)である。この定理では、消費者の市場における選択行動の道標となる選好順序が、資源配分の効率性を判定するパレート効率性原理の構成要素として、規範的な役割をも担わされているからである。

しかし、選好・利害・厚生・選択を必然的に連結する正統派のアプローチは、人間行動の動機²の多様性を全て捨象するという意味で、著しく貧困な理論——rational foolの経済理論——であると言わざるを得ない。事実、選好を利害・厚生・選択という3つの概念に繋ぎ止める連結環のそれぞれに対して、重大な異議申し立てを行う余地がある。

第1に、ある個人の選好と利害を直結する理論的慣行には、選好概念の多義性を無視しているという点で、重大な異議の余地がある。この点を理解するひとつの有効な方法は、ジョン・ハルサニーによって導入された的確な用語法にしたがって、各個人の**倫理的選好**(ethical preference)と**主観的選好**(subjective preference)を概念的に区別することである。前者は、自分の立場や利害関心を意識的に離れ、衡平性や正義など、**没個性的**(impersonal)な考慮に専念して、ある個人が下す社会的選好判断である。後者は、自己の人格と立場にあくまで固執して、同じ個人が下す**個性的**(personal)な選好判断である。この両者とも、それぞれに固有の意味において、当該個人の選好判断と呼ばれるに相応しい資格をもっている。それにも拘らず、個人の(主観的)選好と彼の利害とを直結する正統派理論の慣行は、個人の倫理的選好に対してその正当な位置を認めない極端な立場をとることによって、ひとが公平で没個性的な倫理的判断を行う能力をもつ社会的存在であることを無視する過ちを犯していることになる。

第2に、ある個人の選好と厚生を連結する環も、頑丈であるとはとても言えそうにない。この点を確認するひとつの方法として、ひとの選好は決して先験的・固定的に与えられたもので

はなく、人生の歴史的経験に応じて内生的に形成されるものだという——当然の——事実に注目したい。例えば、習慣的な服用によって麻薬中毒に陥ったひとは、冷静な判断ができる状況ならば麻薬の服用を断ちたいと思うにせよ、禁断症状が現れる際に提供される麻薬に対しては、全く抵抗力を失っている。この場合に、麻薬を提供して彼がそれを喜んで受け取ったとしても、この**選択行動**が彼の**厚生**を高めることに寄与すると考えるのは愚かしい。また、高い望みを抱けば抱くほど失敗の苦痛はさらに激しいことを長い失意の人生から学んだひとは、自らの欲望の方を現実と妥協して鑄造してしまい、客観的には貧しい成果やささやかな好意からも、主観的には高い効用ないし厚生を享受することになりがちである。このようなひとが、貧しい現状を諦観して平穩に暮しているにせよ、彼の鑄造された選好に照らしてこの状態を厚生最適の至福状態とみなすことは、前の例の場合と同様に愚かしい。このように、ひとびとの主観的選好を厚生分析の基礎概念として採用する正統派の厚生経済学の理論的慣行に対しては、**内生的選好形成**という否定すべくもない事実³⁾に照らして、異議を申し立てる余地がある。

第3に、ある個人の選好と選択を結ぶ連結環に必然性がないことを示す事例は、正義感や他人の窮状に対するやむにやまれぬ義務感から、自分の選好の観点からは最適ではない選択肢を敢えて自覚的に選択する行為——センが**コミットメント(commitment)**と名付けた行為——である。明らかに、コミットメントという行為は、個人のもつ倫理観と不即不離の關係に立っている³⁾。個人の選好——特に主観的選好——と彼の選択を直結して、倫理的な思考や道徳的な価値に動機付けられた反(主観)選好的な行為に対して理論的な位置付けを与えない正統派のアプローチは、人間行動の動機に関して著しく視野が狭く、非常に特殊なアプローチであるという他はない。

2. センの機能・福祉・潜在能力アプローチ

正統派理論の基礎に対する自らの厳しい批判

を受けとめ、厚生経済学を情報的貧困から解放するためにセンが新たな福祉の経済学の基礎を構築する作業に乗り出したのは、ほぼ1980年代初頭のことである。この試みに際して採り得べきひとつの方法は、正統派の厚生主義的枠組みを離れて古典派経済学の伝統に回帰して、厚生⁴⁾の物質的基礎すなわち**財貨に対する支配権**に注目する**富裕アプローチ**を採用することである⁴⁾。このアプローチは、ひとの効用ないし厚生という主観的情報に排他的に依存することを避けて、ひとの**物質的豊かさ**という客観的情報に福祉の経済学の基礎を据える**客観主義的アプローチ**に、著しい特徴をもっている。

言うまでもなく、財貨に対する支配権の拡大——物質的豊かさの増大——が、ひとの福祉の前提条件の改善を意味することは、否定すべくもない事実である。とはいえ、福祉を富裕と同一視するこのアプローチは、福祉の経済学的情報的基礎としては明らかな欠陥をもっている。なぜならば、財貨支配権の拡大という意味ではいかに富裕に恵まれているにせよ、心貧しい守銭奴——スクルージ——が高い福祉を享受しているとは思われないし、不幸にも財貨を実際に活用する肉体的・精神的能力に不足するひとにとっては、利用できない財貨の堆積は深い失望の源泉にこそなれ、高い福祉を実現する源泉とはなり得ないからである。この事実は、ひとの福祉を正しく理解するためにはひとの財貨支配権の分析に留まることは許されず、その財貨を用いてひとが**なにをなし得るか・なにになり得るか**という点にまで分析を深める必要があることを示唆している。この示唆を受けとめる興味深い試みこそ、センが精力的に開発・展開しつつある福祉の経済学への**潜在能力アプローチ(capability approach)**に他ならないのである。

このアプローチの第1の基礎概念は、ひとの**機能(functionings)**——ひとの生き方・在り方——である。ひとは、財貨を手段として自ら選択する機能を実現するが、こうして実現された機能は、ひとに**快楽・苦痛・満足・失望**など、さまざまな主観的感覚をもたらす。正統派の主観主義的アプローチならば、実現された機能が

ら派生する主観的感觉——効用ないし厚生——それ自体をひとの福祉の測度とみなすであろうし、古典派の客観主義的アプローチならば、機能を物質的に条件つける財貨支配権——富裕——こそ、ひとの福祉の測度であると考えよう。これに対して、センが提唱する潜在能力アプローチは、よい生き方・在り方を追求する理性的な人間が、実現された生き方・在り方に対して与える内省的・批判的な評価を、ひとの福祉の測度とみなす立場をとる。評価は本質的に熟慮に基づく理性的な活動であって、快楽・苦痛・満足・失望など、無批判的・即自的な主観的感觉や、市場における財貨支配権の物質的・貨幣的な客観的——物神崇拜的——測度よりも、批判的・内省的な社会的存在であるひとびとの福祉(well-being)[生き方・在り方(being)のよさ(wellness)]を考察するための情報の基礎として、遙かに相応しい資格を備えていると考えられるからである。

明らかに、ひとの機能はその実現を支えるために利用される財貨とは概念的に別物であり、その機能の実現が結果としてひとにもたらす満足・効用・厚生とも別物である。財貨は機能に先立ってその物質的条件を整え、満足・効用・厚生は機能の実現の後にくて、実現された機能の主観的な意義を証拠立てるのである。このように、富裕も厚生もひとの福祉の物質的条件とその主観的証拠として、福祉の経済学に占めるべき位置をもっている。しかし、ひとの福祉を富裕や厚生と軽々に同一視すれば、実りある福祉の経済学の建設に対する障害となりかねない。なぜならば、物理的には同じ自転車を提供されたとしても、身体の障害をもつひとには健常者と同じ生き方・在り方を実現することはできないし、主観的には同じ満足・効用・厚生を得ている場合にも、その源泉としての生き方・在り方には、評価の観点から天と地ほどの差異がある可能性があるからである。それだけに、福祉の指標としてひとが実現する機能に対する評価に注目するセンのアプローチには、強い直観的な説得力が備わっている。

センのアプローチの第2の基礎概念は、潜在

能力(capabilities)である。ある時点でひとが財貨に対してもつ支配権の程度は、賦与された財貨の存在量のみならず、財貨が生産・流通・消費される社会的な仕組みにも大きく依存している。これらの制約条件が与えられたとき、あるひと*i*が支配できる財貨の集合を A_i と記せば、彼が選択できる機能の集合は、財貨支配権 A_i および i が選択する利用関数 f_i を用いて、 $f_i(A_i)$ と書くことができる。さらに、利用関数 f_i の選択可能範囲を表す集合を F_i と書くとき、集合

$$F_i(A_i) = \{f_i(A_i) | f_i \in F_i\}$$

を個人*i*の潜在能力集合(capability set)と呼ぶ。個人*i*は、彼に与えられた財貨支配権 A_i の制約のもとで $F_i(A_i)$ に属する機能——生き方・在り方——ならば、自由に選択することができる。この意味において、潜在能力集合は各個人がそれぞれ評価する機能——生き方・在り方——を実行可能な選択肢の中から選択して、自らを社会的に実現する自由度を表現するものに他ならない。この事実に注目して、潜在能力集合をひとの福祉的自由(well-being freedom)の指標と見なすのが、センの潜在能力アプローチの核心にある考え方なのである。

このアプローチによれば、ひとの福祉とは、ひとが達成できる生き方・在り方の質に対する理性的評価の指標である。そしてこの意味の福祉を実現する自由度を表現する潜在能力集合を基本的な情報源として、財貨に対するひとの支配権の在り方、さらには支配権および利用関数の選択可能性の社会的分配パターンを決定する社会・経済システムの在り方への評価に迫ろうというのが、福祉の経済学の新たな基礎を据えたセンの研究プログラムなのである。

センが簡潔な表現を与えたこの福祉観は、満足・効用・幸福など、ひとの主観的感觉に専ら注目する厚生主義的アプローチにつきまとう主観主義的バイアスや、財貨に対する支配権など、人間の選択行動を物質的に拘束する客観的制約に専ら注目する物神崇拜的な富裕アプローチが避け得ない客観主義的バイアスを巧妙に退けて、ひとの主観的特性とその客観的制約の双方に対

して、福祉の形成において果たすべき役割を的確に指定していることに注目すべきである。

3. センの社会保障論：Capability Approach in Action

センの潜在能力アプローチのエッセンスを抽象的に伝えるためには、前節で与えた簡潔な整理が必要かつ十分である。しかし、このアプローチがもつ固有の価値を説得的に示すためには、これまで厚生主義的アプローチないし富裕アプローチに支配されてきた領域において、潜在能力アプローチが新たに拓く眺望を例示することが必要とされる。この主旨から本節では、センの社会保障論に即して潜在能力アプローチの *modus operandi* を例示してみることにしたい。

センによれば、ひとの福祉の実現を妨げる**貧困**(deprivation)の問題には2つの基本的なタイプがあって、効果的な社会保障プログラムの在り方は、いずれのタイプの貧困問題の解決を課題として受けとめるかに応じて異なるものとなる。この2つの問題とは、社会経済システムの在り方に深く根差す持続的で予測可能な**慢性的貧困**の問題と、疫病・飢饉・大不況など、ひとの生活環境を突如として激変させる予測困難な**突発的困窮**の問題である。前者に対処する社会保障プログラムは、生活条件を着実に改善して福祉の持続的な基礎を強化するという意味で、社会保障の**促進的側面**(promotive aspect)に係わっている。これに対して、ひとの生活条件を急激に揺るがす後者の問題に対処する社会保障プログラムは、個人の生活条件の脆さを社会的に補強する仕組みを作るという意味で、社会保障の**保護的側面**(protective aspect)に係わっている。潜在能力アプローチに依拠してセンが構想する社会保障プログラムは、この両方のタイプの貧困問題の解決を目指す**公共的活動**(public action)プログラムに他ならない⁵⁾。

ここで注意を要する点が2つある。

第1に、センがいう公共的活動は必ずしも国家による活動に限定されてはいない。すなわち、公共的活動手段には、国家による政策手段のみならず、はるかに広範な社会的活動手段が含ま

れている。例えば、差し迫る飢饉の危険をいち早く見抜き、警鐘を乱打して政府のタイムリーな政策発動の必要性を訴えるマス・メディアの活動は、通説的な社会保障プログラムには含まれないにせよ、センの概念的枠組みの中では飢饉に対処する公共的活動手段の重要な一部を構成する。悲惨なベンガル飢饉(1943年)以後、インドにおいて大規模な飢饉が絶無となったことの背景には民主政治と報道および批判の自由があったことに留意すれば、公共的活動概念をこのように外延的に拡張することには十分な根拠がある。この例のように、センは字義通り**社会保障**(social security)の在り方を考察しているのであって、**国家による保障**というかぎられた視野から貧困に対する社会的活動プログラムを考察しているわけではないのである。

第2に、ひとの失望・挫折感・困窮意識など、主観的感情に貧困判断の基礎を求める**主観主義的アプローチ**や、財貨・所得・富などへの支配権を欠く点に貧困の指標を求める**客観主義的アプローチ**など、多くの貧困研究の主流を形成してきた考え方とは一線を画して、センの社会保障論においては、最小限の基礎的機能(生き方・在り方)を実現する潜在能力——**基礎的潜在能力**(basic capabilities)——さえ欠いている状態を貧困状態とみなす潜在能力アプローチが採用されている。この立場から見れば、ひとの失望・挫折感・困窮意識などは、**基礎的潜在能力の欠如**として認識される貧困の主観的証拠であるし、財貨・所得・富などへの支配権の欠陥は、基礎的潜在能力を支える物質的手段に生じた失敗の客観的背景であることになる。

それでは、社会保障プログラムへのセンの潜在能力アプローチは、どのような新しい知見に導いてくれるのだろうか。促進的社会保障プログラムと保護的社会保障プログラムのそれぞれについて、センの典型的な論理構成を例示的に紹介することにしたい。

【1】平均的な所得水準を引き上げる経済成長プログラムの成功は、促進的社会保障プログラムの成功にとって、必要条件でもなければ十分条

件でもない。経済成長は基礎的潜在能力の改善を実現する物質的手段を**平均的に**充実させることは確かだが、経済成長の成果の分配——家計間分配・家計内分配——は往々にして著しく不平等であって、たとえ所得の平均水準が上昇したとしても、個々の家計や家計内の個々人の基礎的潜在能力が、全般的に改善される保証はないからである。また、年齢・景気変動・海外市況・農業不作などに起因する所得の時間的な変動は、家計のニーズの時間的な変動と全くパターンを異にすることが例外というよりは通則であるため、資本市場と保険市場が不完全であるかぎり、所得の平均水準が経済成長によって上昇しても、基礎的潜在能力の欠如すなわち貧困が完全に除去される保証はないのである。さらに、基礎的潜在能力の物質的基礎を提供する財・サービスのうちには——公的医療・検疫・警察・国防サービスのように——市場で個人が購入できないものが数多く含まれている。このように様々な理由から、基礎的潜在能力の持続的改善を目指す促進的社会保障プログラムを、平均所得の上昇を目指す経済成長プログラムに単純に帰着させることは、明らかに不適切である。言い換えれば、有効な促進的社会保障プログラムを設計するためには、**財貨・サービスの社会的分配メカニズム**——財貨の家計間分配・家計内分配のメカニズム、社会的な危険分担メカニズム、非市場財・サービスの供給メカニズム——の在り方にまで深く切り込む、制度設計の視点に立つ分析こそ必要とされるのである。

【2】保護的社会保障プログラムの在り方に関しても、センの潜在能力アプローチは新しい視野を拓いてくれる。保護的社会保障プログラムがもっとも必要とされる**飢饉**を対象にして、この事実を例示することにしたい。

報道や批判の自由が保証されている国では、飢饉の予兆となる洪水・渇水・経済的混乱などに関するメディアの報道や抗議行動が、政府に潜在的な危機をいち早く通報する機能を果たしている。しかしながら、注意を喚起された政府機関に断固とした救済活動を敏速に採らせるた

めには、単なる情報の発信のみでは不十分である。事実、過去の飢饉の多くの事例において、不足していたのは情報ではなく、行動に向かう政府の固い決意とコミットメントであった。したがって、保護的な社会保障システムが備えるべき第1の要件は、差し迫る危機に対して政府が敏速・的確な行動に断固としてコミットするように誘導する、効果的な政治的メカニズムが内蔵されていることである。

飢饉と積極的に取り組む政治的コミットメントがなされたとしても、さらにこの決定を有効な援助活動に結び付ける制度的メカニズムを確保するという重要な課題が残されている。通説では、タイムリーな食料援助と犠牲者に食料を直接分配する配給システムこそ、飢饉に対処する**的確な制度的メカニズム**であるとされている。だが、この通説的主張とは裏腹に、むしろ現金援助の方が犠牲者の救済にとって有効である場合も決して少なくない。その背景には、ある地域で飢饉が発生しても、経済全体としては食料の利用可能量は不足していない場合が多いという顕著な事実がある。言い換えれば、食料の総供給量の不足ではなく、食料の地域間流通が的確に起こらないことこそ、飢饉の真の原因となっているのである。このような場合、食料に対する支出が現金援助によって増大する結果として飢饉に襲われた地域の食料価格が上昇すれば、市場を通じるインセンティブに反応して他地域から食料が流入し、食料の利用可能量は増大することになる。ここで重要なのは、食料配給の社会的メカニズムが価格のインセンティブに敏速・的確に反応することが制度的に保証されていることである。したがって、保護的な社会保障システムが備えるべき第2の要件は、援助活動が注入するインセンティブに敏速・的確に反応して食料が確保され供給されることを担保する、効果的・効率的な経済的メカニズムが内蔵されていることである。

このように、政治の民主性と公開性を備えた批判の権利と機会を確保し、切迫する危機を警告する情報に反応して政府が敏速に行動せざるを得ない政治的環境を作りだすとともに、食料

配給の社会的メカニズムが価格のインセンティブに敏速・的確に反応できる経済的環境を作りだし、経済全体として利用可能な食料が緊急に必要なとされる地域に的確に流入する制度的メカニズムを整備することこそ、保護的社会保障プログラムに期待される重要な機能なのである。

基礎的潜在能力の欠如として定義される貧困の問題は、物質的な豊かさを実現し終えた国においても決して無縁ではない。事実、財貨に対する支配権に注目する富裕アプローチと決別して、ひとの生き方・在り方の自由度に注目して福祉概念を再構成する潜在能力アプローチを採用するかぎり、**豊かさのなかの貧困**という表現には、なんの逆説も含まれてはいない。センの社会保障論は、明らかに母国インドの貧困問題を意識して構成されているが、潜在能力アプローチに依拠する福祉と貧困の研究は、はるかに普遍的な問題提起として受けとめられる必要があるのである。

4. センの規範的経済学：批判的評価

伝統的な理論を徹底的に批判して新たに野心的な理論を作る試みに対しては、正統派からの反批判と新理論の弱点に対する攻撃が、激しく加えられることは避けがたい。センの潜在能力アプローチの場合にも、この間の事情に変わりはなく、カウシック・バスター(1987)、ケン・ビンモア(1988)、ロバート・サグデン(1993)など優れた理論家により、正統派の規範的経済学へのセンの批判と彼が礎石を置いた潜在能力アプローチに対して、激しい反批判が投げかけられている。これらの反批判のうちには、潜在能力アプローチが未だ極めてプリミティブな素描の段階に留まっていて、センが批判する正統派の厚生経済学の精緻・巧妙な成果とは比肩すべくもないという主旨の揶揄も含まれている。だが、本稿の冒頭に述べたように、センの道標にしたがうポスト厚生主義の経済学の最近の展開はまことに目覚ましく、この主旨の批判を沈黙させるにはいまや十分な成果が数多く得られている。だが、それ程簡単には払拭できない重大な批判

もある。

第1に、同情やコミットメントなど、正統派の概念的枠組みには収まらない倫理的な行動動機や適応的・内生的な選好形成を強調するセンの正統派批判に対しては、行動とは**環境によって賦課される制約への長期的な戦略的適応**に他ならないと考える進化論的ゲーム理論の立場から、本質的な批判が投げられている。センは利己的選好とは異質な動機を経済単位の行動モデルに直接的・明示的に導入し、人間行動の動機の多様性を正当に承認することを求めているのだが、これらの倫理的な行動動機はひとが自己の行動を正当化するために実際に行う説明とも整合的であるうえ、そもそも実際の人間行動がこれらの倫理的な動機によってしばしば影響されることも、否定できない事実である。それだけに、センの要請はいかにも説得性に富んでいる。この事実を率直に認めたくえて、進化論的ゲーム理論の唱道者は、正統派理論に取って替わるにはセンの理論は本質的にアド・ホックであって、特定の例を巧妙に説明する役には立つにせよ、堅実でオペレーショナルな理論的基礎を欠いていると切り返すのである。これに対して正統派の一元的選好仮説に立脚する彼らの理論によれば、同情やコミットメントなど、あたかも利己的選好とは異質な動機に依拠すると思われる行動でも、利己的な経済単位が繰り返しゲームの均衡として選択するノルムとして説明可能である。すなわち、一見すると利己的な行動動機とは両立不可能な倫理的動機に根差すと思われる行動ですら、実際には利己的な動機を長期的に実現するための均衡戦略に過ぎず、行動の見かけ上の倫理性に対してしばしば行われる強調も、この均衡を維持するための社会的な調整メカニズムの重要な一部に他ならないというのである。

私見によれば、センの理論と進化論的ゲーム理論を二者択一的に考えて、一方を支持すれば他方を棄却せざるを得ないと思い詰める必要は全くない。進化論的なシナリオの要点は、**十分な時間さえ与えれば行動は環境に適応して、利己的な動機に基づく人間行動も倫理的な解釈を**

許す長期均衡を発見して、その均衡を維持するための社会的な調整メカニズムを誕生させるといふ洞察にある。だが、長期均衡の成立を待つ時間的余裕がないコンテクストにおいても、人間は倫理的動機に衝き動かされて崇高な行動に出ることがある。また、人間生活の真実は**短期的にも長期的にも利己的行動と倫理的行動が併存すること——多様性——**にあるというべきである。人間行動の動機も多様だが、人間行動を説明する理論にもそれぞれとことろを得た多様性を認めるのが、理論の現状では賢明な選択なのではあるまいか。

第2に、センの潜在能力アプローチは、厚生主義の狭い情報的基礎を突破して経済システムの成果を記述する視点をひとの機能——生き方・在り方——に据える点では、正統派厚生経済学の情報的基礎の拡大に成功したことは確かである。とはいえ、機能にせよ潜在能力集合にせよ、いずれも経済システムの帰結の記述という点では依然として帰結主義の枠組みに留まっています。帰結を生み出すプロセスないし手続きの内在的特性——手続きの衡平性、情報的効率性、権利の尊重など——を経済システムの性能評価の視角に位置付け得ていない点に、大きな不満の余地を残している⁶⁾。この批判に対して、潜在能力集合はひとの福祉的自由という手続き的特性を表現する概念に他ならないという理解に基づいて、センを擁護する反論が提起される可能性がある。この予想される反論を意識して、われわれの批判をもう少し精密化しておくことにしたい。

そもそも、自由はひとの生き方・在り方の重要な側面であるだけに、自由は機能の選択の可能性として潜在能力集合によって把握されるよりは、もっと直截に機能の一側面として把握されるべきではあるまいか。もしこの代替的な表現方法が採られたならば、自由という機能を記述するために帰結を越えたプロセスの特性の把握が必要となって、センの潜在能力アプローチは厚生主義のみならず帰結主義をも突き抜けて、手続きの衡平性をも機能の記述に含む非帰結主義的な枠組みに発展する可能性がある。私見に

よれば、センの道標を辿る研究の最も多い可能性のひとつは、この方向に開いていると思われる。

第3に、センによる潜在能力集合の概念規定には、実は大きな弱点がある。第2節における潜在能力集合 $F_i(A_i)$ の定義に立ち返ってみると、個人 i には財貨支配権を表す集合 A_i から財貨ベクトル $a_i \in A_i$ を選択する自由と、利用関数 $f_i \in F_i$ を選択する自由が暗黙のうちに賦与されていることに気付く。ここでわれわれが問題にしたい点は、社会内の個人に——センが行ったように——この意味の自由を相互に独立に賦与することが可能であろうかという疑問である。論点を明瞭にするために、社会を構成する個人は1, 2の2人であり、財の種類も2種類にかぎられ、しかも2人の個人に分配できる財の総量は固定されていることを仮定する。また、2人の個人の利用関数は、単に分配された財を消費する活動にかぎられると仮定する。この最も単純な状況においてさえ、個人1(個人2)が選択できる財ベクトルは、個人2(個人1)が選択する財ベクトル次第で制約を受けざるを得ず、各個人ごとに潜在能力集合を独立に定義することは、論理的に不可能なのである⁷⁾。この事実が例示するように、財貨の総量に制約がある分配状況では、社会内の各個人に独立な潜在能力集合を指定することは、論理的に不可能なのである。

私見によれば、この論理的な欠陥は決して修復不可能ではない。事実、社会的選択の理論における権利論や遂行理論(implementation theory)において本質的な機能を担っている**ゲーム形式(game form)**を用いれば、センが当初用いた潜在能力集合の定義にまつわる難点を整合的に解決することが可能であることを示すことができる。

このように、センの潜在能力アプローチはいまだ未完成なシナリオに過ぎないにせよ、その欠陥を補修し厚生主義的アプローチと対抗可能な代替的な規範的経済学にこの理論を彫琢してゆく道筋は、次第に明らかにされつつあるのが現状である。厚生主義的な正統派の規範的経済

学がピグーの創業の理念を見失って久しいだけに、代替的な非厚生主義的な規範的経済学の成熟が大いに待たれている。

(一橋大学経済研究所)

注

* 本稿は、著者の旧稿[鈴村(Winter 1993)]を全面的に改訂して、東北大学農環境倫理学研究会(代表:東北大学農学部・長谷部正教授)で報告した論文「アマルティア・センの経済学と倫理学」を、さらに拡充・整理したものである。これはまた、著者のプロジェクト《Analytical History of Welfare Economics》の研究成果の一部として、センの権利論に対する考察を加筆したうえで、執筆準備中の著書『厚生経済学史のひとびと』に収録する予定である。

1) アーサー・ピグーの主著 *The Economics of Welfare*, London: Macmillan, 4th ed., 1952(気賀健三・千種義人他訳『厚生経済学』全4巻, 東洋経済新報社, 昭和28-30年)の序文には、以下のような印象的なマニフェストが記されている:「経済学者がやり遂げようと努めている複雑な分析は、単なる鍛錬ではない。それは人間生活の改良の道具である。われわれを取りまく悲惨と汚濁、数百万のヨーロッパ人の家庭において消えんとする希望の焰、一部富裕家族の有害な贅沢、多数の貧困家族を蔽う恐るべき不安——これらのものは無視するにはあまりにも明白な害悪である。われわれの学問が求める知識によって、これらの害悪を制御することは可能である。暗黒から光明を! (邦訳第1巻, p. 61)」。

2) 例えば、ピグーの主著の刊行後約40年の時点で厚生経済学の歴史と現状をサーベイしたエドワード・ミシャン[Mishan(1965)]は「厚生経済学というのは、経済学者が道楽半分に手を出してそれから捨ててしまい、やがて良心の痛みを感じて立ち戻っていく」分野であると述べた。厚生経済学に対するミシャンの特徴付けが現在でも正しければ、ピグーのマニフェストと比較して余りにも大きな落差があることに失望して、厚生経済学は単なる知的遊戯であるに過ぎないと考えるひとがいても無理はない。私見によれば、センがもたらした重要なインパクトのひとつは、厚生経済学をミシャン流ニヒリズムから救出してもっと血の通った学問に作り替えて、人間生活の改良の道具を探求するピグーの創業の理念に立ち戻らせたことにある。

3) コミットメントを経済行為の動機の構成要因として認めると、再構成された厚生経済学は単に厚生主義の枠組みを踏み越えるのみならず、実際にはさらに帰結主義の枠組みすら踏み越えることになる蓋然性が高い。コミットメントの感覚は、帰結の如何を度外視して敢えて行動する責任感覚と、深く関わっているからである。この点に関しては、本稿の最終節でもう一度触れることになる。

4) ジョン・ヒックス[Hicks(1981)]の興味深い証

言によれば、ピグーは厚生経済学を主観主義的な規範的経済学(normative economics)と理解する通常の解釈を歓迎しなかった。ピグーは古典派経済学の生産と分配の理論を継承して厚生経済学を体系化したのであって、古典派経済学者と同様に、彼の関心は専ら富の生産と分配の実証的分析(positive analysis)にあったというのがヒックスの主張である。この理解に従えば、ピグーと古典派を分断するクレバスは関心対象の差異——規範的経済分析 versus 実証的経済分析——ではなく、富の評価を古典派のように費用に依拠してではなく、限界効用に基づいて行うという分析方法の差異——効用アプローチ versus 費用アプローチ——にあることになる。

5) 社会保障の保護的側面には2つの課題が含まれている。第1の課題は、困窮状態に急激に陥った人々を当面の窮状から緊急に救出することである。第2の課題は、人々を突発的な困窮に対する不断の不安から解放するために、制度的な安全装置を設計して、持続的に機能させることである。これらの課題の達成はもちろん容易な任務ではないにせよ、長期にわたって持続的貧困をもたらしてきた要因を根源的に除去しようとする点において、社会保障の促進的側面は一層困難で、一層野心的な課題に取り組むものだというべきかもしれない。

6) 社会的意思決定の帰結のみに注目する帰結主義を批判して、これらの帰結が実現されるプロセスないし手続きの重要性を強調する点で、この批判は進化論的ゲーム理論の観点と共通している。社会的選択の理論における手続き的観点の重要性に関する一層の詳細は、Sen(1996)および鈴村(1996, 1997, 1998b, 1998c)を参照して戴きたい。

7) この事実を最初に明示的に指摘したのはバース(1987)である。

参考文献

- セン, アマルティア[大庭 健・川本隆史訳](1990)『合理的な愚か者——経済学=倫理学的探求——』勁草書房。
- 鈴村興太郎(1982)『経済計画理論』東京: 筑摩書房。
- 鈴村興太郎(Winter 1993)「アマルティア・セン」社会保障研究所(編)『社会保障理論とその周辺: 海外の研究者たち』(『海外社会保障情報』第105号)pp. 71-80。社会保障研究所(編)『社会保障論の新潮流』有斐閣, 1995年, pp. 197-211に再録。
- 鈴村興太郎(1998)「ルールの社会的選択と自生的秩序」第2回進化経済学会大会パネル討論: 経済の進化をどうとらえるか」報告論文。
- Basu, K. (1987) "Achievements, Capabilities and the Concept of Well-Being," *Social Choice and Welfare*, Vol. 4, No. 1, pp. 69-76.
- Basu, K., Pattanaik, P. K. and K. Suzumura, eds. (1994) *Choice, Welfare, and Development: Festschrift in Honour of Amartya Sen*, Oxford: Clarendon Press.
- Binmore, K. (1988) "Book Review: *On Ethics and Economics* by Amartya Sen," *Economica*, Vol. 55, No. 218, pp. 279-282.

- Dreze, J. and A. Sen (1989) *Hunger and Public Action*, Oxford: Clarendon Press.
- Dreze, J. and A. Sen (1991) "Public Action for Social Security: Foundations and Strategy," in Ahmad, E., Dreze, J., Hills, J. and S. Sen, eds., *Social Security in Developing Countries*, Oxford: Clarendon Press, pp. 3-40.
- Gaertner, W. and P. K. Pattanaik (1988) "An Interview with Amartya Sen," *Social Choice and Welfare*, Vol. 5, No. 1, pp. 69-79.
- Harsanyi, J. C. (1976) *Essays in Ethics, Social Behaviour, and Scientific Explanation*, Dordrecht: Reidel.
- Hicks, J. R. (1981) *Wealth and Welfare*, Oxford: Basil Blackwell.
- Khan, H. (March 1993) "A Conversation with Amartya Sen," *The Voice of Bangladesh*, pp. 19-25.
- Klamer, A. (Winter 1989) "A Conversation with Amartya Sen," *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 3, No. 1, pp. 135-150.
- Mishan, E. J. (1965) "A Survey of Welfare Economics, 1939-1959," in *Surveys of Economic Theory: Money, Interest, and Welfare*, New York: St. Martin's Press.
- Nussbaum, M. C. and A. Sen, eds. (1993) *The Quality of Life*, Oxford: Clarendon Press.
- Samuelson, P. A. (1981) "Bergsonian Welfare Economics," in Rosefielde, S., ed., *Economic Welfare and the Economics of Soviet Socialism*, New York: Cambridge University Press, pp. 223-266.
- Sen, A. (1970) *Collective Choice and Social Welfare*, San Francisco: Holden-Day. Re-published, Amsterdam: North-Holland, 1979.
- Sen, A. (1973) "Behaviour and the Concept of Preference," *Economica*, Vol. 40, No. 159, pp. 241-259.
- Sen, A. (1977) "Rational Fools: A Critique of the Behavioural Foundations of Economic Theory," *Philosophy and Public Affairs*, Vol. 6, No. 4, pp. 317-344.
- Sen, A. (1979) "Utilitarianism and Welfarism," *Journal of Philosophy*, Vol. 76, No. 9, pp. 463-489.
- Sen, A. (1981) *Poverty and Famine: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Oxford: Clarendon Press.
- Sen, A. (1983) "Liberty and Social Choice," *Journal of Philosophy*, Vol. 80, No. 1, pp. 5-28.
- Sen, A. K. (1985a) *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: North-Holland (鈴木興太郎訳『福祉の経済学——財と潜在能力——』岩波書店, 1988年).
- Sen, A. K. (1985b) "Well-being, Agency and Freedom: The Dewey Lectures 1984," *Journal of Philosophy*, Vol. 82, No. 4, pp. 169-221.
- Sen, A. (1985c) "Rights and Capabilities," in Honderich, T., ed., *Morality and Objectivity: A Tribute to J. L. Mackie*, London: Routledge & Kegan Paul, pp. 130-148.
- Sen, A. (1987) *On Ethics and Economics*, Oxford: Basil Blackwell.
- Sen, A. K. (1988) "Freedom of Choice: Concept and Content," *European Economic Review*, Vol. 32, No. 2/3, pp. 269-294.
- Sen, A. (1992) *Inequality Reexamined*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Sen, A. (1995) "Rationality and Social Choice," *American Economic Review*, Vol. 85, No. 1, pp. 1-24.
- Sen, A. K. (1996) "Maximization and the Act of Choice," *Econometrica*, Vol. 65, No. 4, pp. 745-779.
- Sen, A. K. (1997) *On Economic Inequality*, Expanded edition with a substantial annexe 'On Economic Inequality after a Quarter Century' by James E. Foster and Amartya Sen, Oxford: Clarendon Press.
- Sen, A. K. (1998) *Freedom and Social Choice*, Kenneth Arrow Lectures.
- Sugden, R. (1993) "Welfare, Resources, and Capabilities: A Review of *Inequality Reexamined* by Amartya Sen," *Journal of Economic Literature*, Vol. 31, No. 1, pp. 1947-1962.
- Suzumura, K. (1983) *Rational Choice, Collective Decisions and Social Welfare*, New York: Cambridge University Press.
- Suzumura, K. (1996) "Welfare, Rights, and Social Choice Procedure: A Perspective," *Analyse & Kritik*, Vol. 18, No. 1, pp. 20-37.
- Suzumura, K. (1997) "Consequences, Opportunities, and Procedures," Forthcoming in *Social Choice and Welfare*.
- Suzumura, K. (1998a) "Paretian Welfare Judgements and Bergsonian Social Choice," Discussion Paper No. 341, The Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.
- Suzumura, K. (1998b) "Consequentialism and Procedural Evaluations in Social Welfare Judgements," Discussion Paper No. 343, The Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.